

とにあれ、投票の意思統一の集まりで真つ先に  
異を唱えた初瀬左右衛門は、彼に同調する何人か  
がいたにもかかわらず、彼一人がおおかたの長老  
たちから白い目でみられる結果となった。村八分  
寸前だ。

長老への反発が徳左右衛門を若い層に近づけ  
た。まず目をつけたのは、成人式の講話らしい若者  
たちに人気のある八郎である。つまり、ゼンガク  
レン同士であると徳左右衛門は思う。

ちょうど八郎の方でも、花ノ根の若者たちに何  
であったと伝えられているが、風紀を乱すという  
理由で禁止され、現在にいたっている。

「説明するよりは、初瀬さん自身が習いはじめ  
ることであります」

八郎はことば少なかつた。

「私がダンスするなんて、何やら面映ゆくて  
なりません。盆踊りほどに娘たちが危険な目にあ  
うものでなければ、何の差しさわりもあるまいも  
のでありますが、もう体も固くなった私のよう  
な者にも踊れる踊りでありましょうか」

か健康なレクリエーションを与えたいと考えは  
じめていた矢先であった。八郎は手始めに、フォ  
ークダンスとコーラスの集いを企画していた。

「コーラスというのはみんなで歌をうたうこと  
であるのはわかるのでありますが、フォークダン  
スというのはやっぱり踊りであろうと思うのであ  
りますが、どのような踊り方をする踊りでありま  
すか」

徳左右衛門はふと盆踊りを連想してしまった。

この花ノ根で盆踊りが踊られなくなつて長い。最  
近まで生きていた木戸ゆいの母親は盆踊りの花形

何やら気恥ずかしそうにいう徳左右衛門に向か  
つて八郎は人なつっこい微笑を浮かべた。

「フォークダンスというのは、その西洋の盆踊り  
と考えていただいて結構なのであります。体の  
固い人でも腰の曲がった人でも容易に踊れるので、  
都会ではたいへんな人気で広まっているのであり  
ます。初瀬さんの体の固さなど、フォークダンス  
をしているうちにきつと柔らかくなるのでありま  
しょう」

徳左右衛門の気が多少動いたのを悟つた八郎は、

効果的に話を進め、その会場に神宮寺の大広間を借りるべく、従兄弟の瞭然師に交渉しようというまで持ち込んだ。

年寄りすら集まりの少ない神宮寺に若い男女が来るといふ。この話をオジユツサンが喜ばないわけがなかった。

「それはいいことであります。お茶くらいサービスいたしましたよう。徳左右衛門，お前はどこやら得体のしれぬ悪さがあると気がかりでなりません。年齢につれてなかなか良いところもあるようであります」

こうした口ぶりでやられるから、徳左右衛門は八郎を置いて一人で来たのであった。

フォークダンスとコーラスの会の第一夜、もの珍しさも手伝ってか、なんと花ノ根総人口の四十%が東側の尾根の峠にある神宮寺に集まった。

「この人出を見たら、露店商人たち、商売はこなかったのを残念がるでありますよう」  
忙しくはあったが、瞭然さん、ひとりで笑った。このまま参加者がふえていったら、この会が

ある夜は、花ノ根のほとんどの家がからっぽになってしまふのではないかと思われたのであった。

三野庄平はじめ長老たちの顔がほとんど全部そろっていたのには八郎もびっくりした。中には高校生の子供からフォークダンスの何たるかを教わっていた者もいるのであるが、西洋の盆踊りは、それほどにも花ノ根の興味をそそったのである。

あまつさえ、庄平などは初めての会から娘つ子の手をとって踊った。だれかれかまわずに手を

にぎることのできる魅力がたまらなかった。これには見物一同、笑いと拍手を惜しまなかった。

さしあたり土曜の夜と八郎はスケジュールを定めたが、回が進むにつれ取っかえ引っかえ花ノ根の住人みんなが顔を見せたのに、最後まで見向きもしなかったのはオタユウサンであった。

初太郎宮司は気に入らなかった。瞭然師のいう花祭り盛大化などの思いつきを黙殺するのは簡単だった。もう一歩進めて花ノ根の人間がいくら神宮寺に集まろうと、そんなことも初太郎にはど

うでもよかった。宮司が不快に思うのは、見物人の多勢いる前で、男と女が淫らがましく手をとりあつて踊るといふ卑猥さであった。

日本古来の盆踊りは手をとりあうことなど全くなかった。そういう謹厳な踊り方をしていても風紀が紊乱したことは花ノ根の歴史が証明している。おおつぴらに男女が手をとりあつていたのでは、風紀はどこまで乱れ落ちるか、想像するだけに恐ろしい。

こういう催しを花ノ根に持ちこんだ八郎はもたぬだろうと、あなたはかまわないと考えているのでありませんか」

鼻の下をのびして踊っている若い男たちにいったん戦争になったときはどういふ働きができたのか、日本はまた敗戦の汚名を被らなくてはならないのであるか。考えれば考えるほど、初太郎氏には憂うべき事柄ばかりであったのである。

「私がいやになるのは、元老のあなたまでが、自分の年齢も考えず、あのような踊りにうつつて抜かすことであります」

とより、それを助成した徳左右衛門、会場を貸したオジュツサン、みんなよくない。道徳に対する考え方がどこか間違っている。やっぱり瞭然坊主には、わかっているようで何もわかってはいないのだ。

東雲宮司は元村長である三野庄平がこの催しに対してどのように考えているのか、嚴重に詰問したものだ。

「いったい平気な顔をして見ていられることであるかどうか。花ノ根の娘たちがみんなむすめでオタユウサンの追求はなかなかきびしい。庄平には初太郎が自分の好色を見すかしていつているように思われて、返すことばが見つかからない。

「しかし、思うにオタユウサンはあのフオークダンスなるものを実際に見たことも踊ったこともないのでないでしょうか。それでいてそのように私を非難するとは、私には理不尽に考えられてなりません」

ようやく庄平は反撃の糸口を見つけた。宮司は「見なくてわからんという方が理不尽である」と

理不尽このうえもない。

「私にはちゃんと耳がありますから、神宮寺の

騒ぎはちゃんとわかるのであります。なにさま、

神宮寺はわが神社の隣にあるのでありますから。

あの娘どものけたたましい笑い声は何ごとでありますしょう。はしたない」

「娘たちがむすめでなくなると官司はいわれるのであります、ちゃんとした証拠が何かあるのでありますか」

「これはまた愚かしいこととばを聞くものであります。証拠などあれば遅すぎるのであります。

「しかし、あの踊りはなかなかいいものであるのであります……」

にがての初太郎からさんざんの口をきかれたあと夜道を帰りながら、庄平はもう一度呟いてみる。

フォークダンスとコーラスの会は、回を重ねるにつれて初めほどには見物人を呼ばなくなったが、若者たちにはますます好評で、前向きな仲間意識をさえ見せはじめた。

この会のメンバーで最も熱心なのは中村ソノの二人の娘で、一度も欠席しなかった。二人とも

しかも、私は肉体的なことを申しているではありません。精神の問題であります。人間にとつ

て精神が墮落するということは、何にもまして墮落することになるのであるということが、元老であるあなたにして理解できないのでありますか」

この唯心論者によれば、二十歳になった男女を一堂に集めての成人式など、もつてのほかでしかないという持論なのであるから、夜、踊りをとにもするなどは、氣違わざの埒外にあるというものであろう。

八郎がこの村に帰っていらい、ずっと好意を抱いていたのである。県議選のころ、卒業式に出席するために正装して花ノ根から出ていったとき、もうこのまま帰ってこないのではないかと氣を揉んだのも二人だった。

八郎も大八車で炭を運ぶ帰りや、カワラ木から帰宅する途中、中村芸術美容館へ立ち寄って気軽く話しこんだりしたものだ。ソノは娘たちが八郎を心憎からず思っていることを知ってはいたが、どちらと結ばれても似合いであると思っ

もし八郎が娘を映画に誘えば、二人きりのアベックで出してやってもいいとさえ考えているのに、

八郎は気が弱いのか、一度も誘ったことがない。

それがソノにはいささか不満である。

木戸ゆいにこうしたライバルの考えが見ぬけないはずはなかった。

「おソノ後家は、二人の娘を天秤にして八郎と

結びつけようとしています」

店へくる客ごとに言いふらしたものだ。天秤に

かけるといえば、ゆいが天秤にかけた男の数は、

この花ノ根に限っても五指に余ったであろう。そ

うした自分の脛の疵には全く気づこうとしない

ところが、ゆい後家の女傑たるところでもあった。

この中傷には、ソノの方がとりあわなかった。

「そのようなヤキモチをやく前に、せいぜい娘

でもつくって、八郎とめあわせてみることであります」

好き者ながら生ませる女のおゆい後家には、あま

りにも応える反撃であったらう。

(以上8月20日放送分)